

## 新サツキの長穂苗による早期コンテナ栽培法

農業研究部 園芸研究課

### 1 成果の内容

植木類の需要は、量販店での個人消費が増加傾向にあり、輸送性、取り扱いの簡便性からコンテナ規格が急速に伸びています。サツキのコンテナ栽培は導入が比較的送れて始まっていますが、慣行の10cm程度の苗を用いるため、栽培期間1年以上を要します。

そこで、コンテナ栽培は投資額も大きく生産コストが多く必要なことから、短期間に商品化（高さ25cm×株張り25cm）するための技術について検討しました。

新サツキの挿し木苗生産は、8月にミスト条件下に128穴のセル成型を用いて行うことで、発根率80%以上、十分な根量が得られる苗が翌年の3月に得ることが出来ました。

挿し穂長規格15cm、20cm、30cmの苗を15cmポリポットにそれぞれ鉢上げし生育を調査した結果、表1のように樹容積は伊勢路紫、伊勢小町で挿し穂長20cmが、伊勢路紅では挿し穂長30cmで最大となりました。しかし、図2は伊勢路紅の株張りですが、鉢上げ8ヶ月後では高さ25cm以上で株張りが大きくなり、そ

れ以下では、商品規格の株張り25cmに達していません。また、15cm規格では商品規格に達していません。唯一、挿し穂長20cmは、高さ、株張り共に商品規格に達しています。

このことから、新サツキのコンテナ栽培における期間を短縮する手段として挿し穂長20cmの苗を3月に鉢上げすることで、11月には商品規格になり、栽培期間を大幅に短縮できることが判明しました。

### 2 技術の適用効果と適応範囲

新サツキの栽培期間を短縮する技術ですが、本県で多く栽培されている三重サツキを始め、ツツジ類のコンテナ栽培にも技術の適応が可能です。

### 3 普及・利用上の問題点

この技術は、慣行増殖法に用いる挿し穂長より長いため、確保可能な挿し穂数が減少することから、より多くの株から挿し穂を確保する必要があります。

(鎌田 正行)

表1 品種別の挿し穂長と樹容積の関係

挿し穂長	伊勢路紅	伊勢路紫	伊勢小町
15cm	350ml	782ml	—
20cm	1600ml	2209ml	1613ml
30cm	1968ml	1890ml	1112ml

備考： 樹容積＝長径×短径×高さ

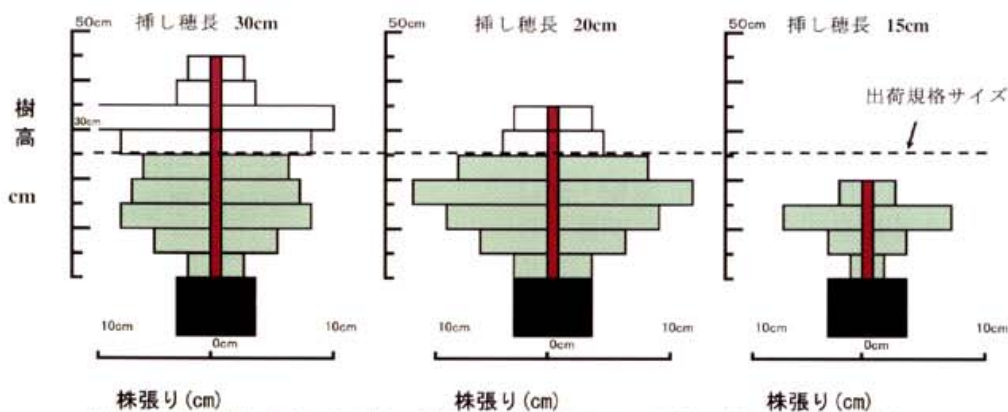


図2 伊勢路紅における挿し穂長と肥培管理8ヶ月後の株張りとの関係

耕種概要：定植－H17年3月、15cmポット、用土－赤玉60+ピートモス40肥料－緩効性化成N合計600mg、無加温温室で管理、生育調査：H17年11月